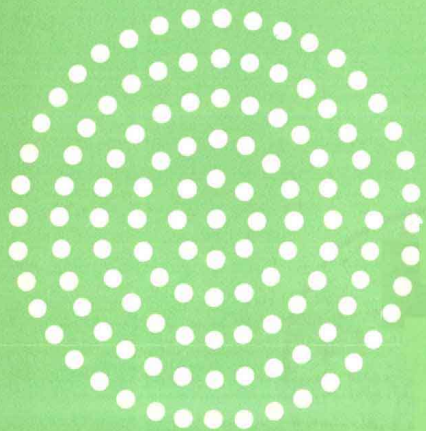


日本の詩集 2

石川啄木詩集





日本の詩集 2

石川啄木詩集

昭和四十三年三月十日 初版発行
昭和四十九年五月三十日 七版発行

著者 石川啄木

発行者 角川源義

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三
◎東京一九五二〇八◎一〇二
電話東京〇五三三三二(大代表)

印刷カラー 晁美術印刷株式会社

本文旭印刷株式会社

函・扉 晁美術印刷株式会社

製函 川合紙器加工所

製本 株式会社 鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたしません

目次



歌集 一握の砂

我を愛する歌

煙

一

二

秋風のこころよさに

忘れがたき人人

一

二

手套を脱ぐ時

歌集 悲しき玩具

詩集 呼子と口笛

はてしなき議論の後

ココアのひと匙

激論

書斎の午後

墓碑銘

古びたる鞆をあけて

家

飛行機

詩集 あこがれ

杜に立ちて

啄木鳥

隠沼

荒磯

夕の海

孤境

山彦

アカシヤの蔭

あゆみ

二つの影

落葉の煙

北海道の詩

水無月

馬車の中(以上二篇「ハコダテの歌」)

雪の夜(小樽にて)

磯

知人岬

幽思(以上三篇釧路にて)

一七

一五

一八

一八

一八

一八

一八

一八

一九

一九

一九

一九

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

「あこがれ」以後・その他の詩

三〇九

公孫樹

三二〇

桜のまぼろし（「黄草集」）

三三三

泣くよりも

三三六

あによめ（以上二篇「泣くよりも」）

三三八

夏の街の恐怖

三三九

起きるな

三三三

事ありげな春の夕暮

三三三

柳の葉

三四四

拳（以上五篇「心の姿の研究」）

三三五

路傍の草花に

三三六

口笛
手紙

三三六
三三九

花かんざし

三三〇

あゝほんとに

三三二

昨日も今日も（以上六篇「詩六章」）

三三三

無題（夏の日の遠き旅路に……）

三三三

一塊の土

三三四

無題（屋根又屋根……）

三三三

はてしなき議論の後

三三六

一

三三六

八

三三九

解説

評伝

鑑賞

詩の旅

年譜

近藤 芳美 三三三

吉田 精一 三三〇

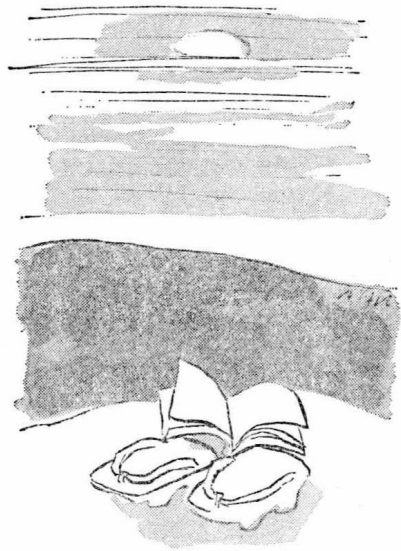
大竹 新助 三三六

三三八

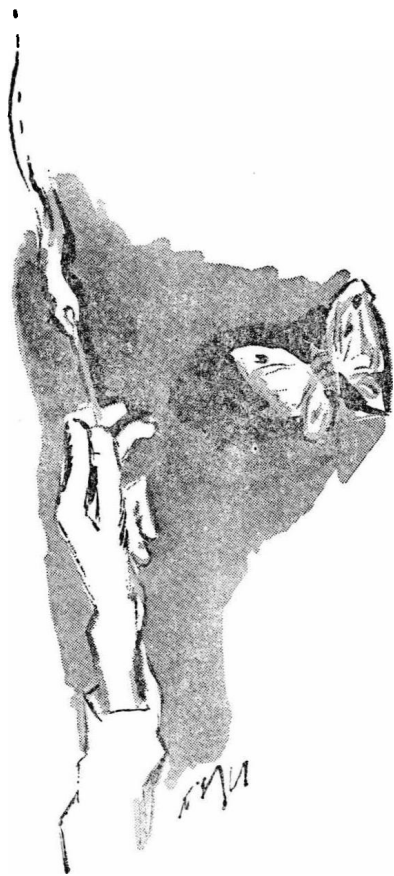
写真協力

岩田恒雄・志賀芳彦・柴田勇治・中村由信
原弘男・布施正直・本多信男

石川啄木詩集



歌集
一握の砂



我を愛する歌

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

頬につたふ

なみだのこはず

一握の砂を示しし人を忘れず

大海にむかひて一人

七八日

泣きなむとすと家を出でにき

いたく錆びしピストル出でぬ

砂山の

砂を指もて掘りてありしに

ひと夜よさに嵐あらし来きたりて築たきたる
この砂山すなは
何の墓はかぞも

砂山すなの砂すなに腹はら這はひ
初恋はつこひの

いたみを遠とほくおもひ出でづる日

砂山すなの裾すそによこたはる流木ながぼくに
あたり見みまはし

物言ものごとひてみる

いのちなき砂すなのかなしさよ
さらさらと

握にぎれば指ゆびのあひだより落おつ

しつとりと

なみだを吸すへる砂すなの玉

なみだは重おもきものにしあるかな

大といふ字を百あまり

砂に書き

死ぬことをやめて帰り来れり

目さまして猶なほ起き出でぬ児の癖くせは

かなしき癖ぞ

母よ咎とがむな

ひと塊くわいの土に涎よだれし

泣く母の肖がほ顔がほつくりぬ

かなしくもあるか

燈影ほかげなき室しつに我あり

父と母

壁のなかより杖づえつきて出づ

たはむれに母を背負ひて

そのあまり軽きに泣きて

三步あゆまず

飄然と家を出でては

飄然と帰りし癖よ

友はわらへど

ふるさとの父の咳する度に斯く

咳の出づるや

病めばはかなし

わが泣くを少女等きかば

病犬の

月に吠ゆるに似たりといふらむ

何処やらむかすかに虫のなくごとき

こころ細さを

今日もおぼゆる

いと暗き

穴に心を吸はれゆくごとく思ひて

つかれて眠る

こころよく

我にはたらく仕事あれ

それを仕遂げて死なむと思ふ

こみ合へる電車の隅に

ちぢこまる

ゆふべゆふべの我のいとしき

浅草の夜のにぎはひに

まぎれ入り

まぎれ出で来しきびしき心

愛犬の耳斬りてみぬ

あはれこれも

物に倦みたる心にかあらむ

鏡とり

能ふかぎりのさまざまの顔をしてみぬ

泣き飽きし時

なみだなみだ

不思議なるかな

それをもて洗へば心戯おどけたくなれり

呆あきれたる母の言葉に

気がつけば

茶碗ちawanを箸はしもて敲たたきてありき

草に臥おて

おもふことなし

わが額ぬかに糞ふんして鳥は空に遊べり

わが髭ひげの

下向く癖くせがいきどほろし

このころ憎にくき男おとこに似たれば

森の奥より銃声聞ゆ

あはれあはれ

自みづから死ぬる音ねのよろしき

大木の幹みきに耳あて

小半日

堅かたき皮をばむしりてありき

「さばかりの事に死ぬるや」
「さばかりの事に生くるや」
止せ止せ問答

まれにある

この平たいちなる心には

時計の鳴るもおもしろく聴きく

ふと深かそき怖おそれを覚え

ちつとして

やがて静かに躋はまをまさぐる

高山のいただきに登り

なにながなしに帽ぼうし子をふりて
下くだり来しかな